コレクション **中国同時代小説** 全10巻

第4巻 離婚指南

スートン 蘇童 Su Tong

視覚と嗅覚に訴える作家——

中短篇小説集。『離婚指南』は、五人の男女が繰り広げる離婚騒動を通じて、混沌とした中国社会とそこに暮らす人々の虚無感を描く。ほかに、新中国成立によって強制的に解放された二人の娼婦のその後の人生を描く『紅おしろい』、三世代の女性の生き方を対比的に描き『ジャスミンの花開く』として映画化された『女人行路』などを収録。

※本紙には、そのうちから短篇「垂楊柳にて」を収めた。

【著者紹介】一九六三年、蘇州生まれ。北京師範大学在学中から創作を始める。八〇年代に実験的な文体で中国文学に新しい可能性を開き、同傾向の作家たちとともに「先鋒派」と呼ばれた。その後は比較的平易な文体で、大衆の支持を受ける作品を書くようになった。最新の長篇『河・岸』（二〇〇九年。邦訳は二〇一二年、白水社より刊行）は、マン・ブッカー・アジア賞を受賞している。

【収録作品】「クワイ」「垂楊柳にて」「刺青時代」「女人行路」「もうひとつの女人行路」「紅おしろい」「離婚指南」

【訳者】竹内良雄（慶應義塾大学名誉教授）、堀内利恵（慶應義塾大学ほか講師）

Take Free !

勉誠出版 Tel03-5215-9021 Fax03-5215-9025
WEBSITE. http://bensei.jp

「コレクション中国同時代小説」第一期（第1巻〜第5巻）
2012年4月下旬刊行！
※第二期（第6巻〜第10巻）は6月刊行予定

※実際の書籍とはレイアウトが異なります。

垂楊柳（チュイヤンリウ）にて

寺前村（スーチェンツン）の交通事故の現場から、すでに遠く離れたのに、運転手はまだ驚きがおさまらなかった。

雨の公道は、ひっそりと静まりかえっていた。窓外の鉛色の空から、雨音だけが絶え間なく訪れて来た。ワイパーが弱々しく左右に動き続け、フロントガラスには、終始ひと筋の水が不規則に流れていた。バック・ミラーで見ると、公道は黒い潮となって彼のトラックを追いかけているようだ。そしてトラックは、ひとりぼっちの船のように風雨の中で揺れ動いた。バック・ミラーは同時に、蒼ざめて疲れきった顔を映し出していた。額の汗がぼやけて見え、驚きの後の瞳は、まだ平静さを取り戻していなかった。彼はなんだか車に酔った気がした。正確には、より船酔いに似ているといってよかった。公道が激しく波立っているように感じられ、長年に渡る運転手としての生活の中でもこんな事は初めてだった。彼は公道に深い恐怖を感じた。

雨はずっと降り止まなかったが、山の峠を曲がりこんだ後、明らかに雨粒が小さくなった。畑でトウモロコシの葉に当たる雨音も、もう先ほどのように荒々しくなく、川の急流の水音も聞こえて来た。北の空はまだ暗いものの、南には大分青空が覗き、明るくなった。公道の左前方に、粗末な赤煉瓦の小さな建物がいくつか現われ、女性歌手が流行歌を歌う高い声がそこからかすかに伝わって来た。青蔵（チンザン）チベット高原を歌う歌だ。運転手は、垂楊柳（チュイヤンリウ）に着いたのだとわかった。去年、彼がここを通りかかった時、ラジカセは一日中この歌をかけていた。「あれが青蔵高原、あれが青蔵高原よ」。今年もやはりこの歌だ。ここは青蔵高原ではない。運転手は、垂楊柳に着いたのを知っていた。もっぱら、トラックの運転手相手に商売をしている所だ。垂楊柳には、街道沿いに合計三軒の店があった。一つはガソリ

sample

ンスタンド、一つは煙草や酒や食べ物を扱う小さい雑貨屋、さらにもう一つは飯屋なのか宿屋なのかはっきりしない店だった。飯屋は、けばけばしい色合いで公道に面していたが、宿屋はその裏に隠れるように身をひそめていた。垂楊柳の人がいうには、実は同じ一人のおかみがすべての店を経営しているのだった。

緑色のミニスカートを穿いた若い娘が、模様入りの傘をさして路上に立ち、客引きをしていた。片腕が傘の下からまっすぐに伸びて、手つきは色っぽかったが、見たところまるで警官が交通整理をしているようだった。若い娘は両脚を交叉させていた。その脚は、黒色と白色が半分ずつ入り混じってむき出しになっており、とても人目を引いた。運転手が目をこらしてよく見ると、娘は黒い絹のストッキングを穿いているのだった。ストッキングには、きらきら光る真珠の飾りがちりばめられて、星の輝く夜空のようだった。

「お兄さんいらっしゃい。水を飲んで休んでから行きなさいよ」

若い娘は身振り手振りでいい、それから口を覆って笑った。

運転手は、もちろんこのような手振りを見慣れていた。彼はすぐには反応しなかった。彼の視線は、娘の顔と公道の間を漂い、ひどくためらっていた。一番先に停車を決め、ブレーキをかけたのは、彼の手だった。運転手が自分の手の導きに従うと、緊張した体から急に一気に力が抜けた。ハンドルにもたれて、彼は言った。

「いいだろう、ひと休みしてから行くとしよう」

運転手は自分の状態がわかっていた。だがその娘は、こんなにも早く彼を落ち着かせた。車をバックさせて停める時、バック・ミラーに映る彼の顔は、確かにまだ蒼ざめているとはいえ、自分でも不思議なほど目に活力がほとばしり、ある暗い期待の光をたたえていた。その光は熱かった。

娘は、まだいくぶんあどけなさを残していて、愛らしい笑顔は好ましかった。相変わらずはにかんでいた。彼女は、車に積んでいる物に興味があり、爪先立ちして荷台を覗いたが、中は空だったので、明らかにがっかりして言った。

「空っぽね。さっき行ったお客さんは、コカコーラを車いっぱい積んでいたよ！」

sample

運転手は言った。
「それがどうした、そいつだって、お前に飲ませてくれやしないだろ」
娘は、男が照れ隠しに取り繕ったことがわからず、自分がからかわれているのだと勘違いした。雨傘を閉じて水を払いながら、運転手に言い返した。
「くれるといったって、有難くもないよ。咳止めのシロップみたいにまずくって」
垂楊柳は、去年と変わりがなかった。店の入口のぬかるみには、一面にトラックのタイヤの跡があり、ちょっと雨が降れば、大小さまざまな無数の水たまりができた。車屋の塀ぎわに、濡れそぼった古タイヤが山のように積んであった。飯屋で飼っている数羽の鶏が、水たまりの傍を歩きまわっていた。飼を捜しているのかも知れない。
「お兄さん、こっちよ」
若い娘は、傘で運転手に合図しながら飯屋に向かって歩いた。
「こっちよ。そっちじゃないわ。そっちは水たまりがある！」
「これ位の距離を、俺が歩けないってか？」
運転手は笑って言った。
「そんなに気を遣わなくてもいいさ」
「おかみさんに言われてるの、第一印象に気をつけるように、って」
娘は真面目くさって言い訳した。
「先月、おかみさんは経営の勉強会に行って来たのよ」
「何が第一印象だ？　俺は常連で、何度も来たことがあるのに、何でお前を見かけなかったんだろう？」
運転手は、水たまりを跳び越えると、急に去年のあの娘の名を思い出した。
「小雪（シャオシュエ）だ、小雪はいるか？」

sample

「どの小雪？」
娘の目がちょっと光った。
「わたしが小雪よ。わたしを知っているの？」
「俺はお前のことは知らないよ。俺が知っているのは、あの小雪さ。丸顔で髪の短い、お前よりもちょっと太めで色の黒い子だ。まだこの飯屋で働いているのかい？」
「ここでは、小雪はわたし一人よ、どうしてそんなにいっぱい小雪がいるの？」
娘は言った。
「その小雪は何をしていたの？」
「お前と同じだよ。ここに立って客引きをしていた」
「嘘！　わたし、ここに来て一年以上たつのよ、わたしが小雪よ。ほかに小雪がいるもんですか、ありっこない！」
娘は、馬鹿にされたかのような反応を示した。彼女は振り向いて、運転手の顔をちらりと見、また彼の靴に目をやった。
「あら、お客さんの靴、汚いじゃない」
彼女は突然叫び始めた。
「気をつけて歩くように言ったのに、聞かないんだもの。足を見てごらんよ、泥だらけよ！」
運転手は、足の泥などどこ吹く風で、眉をしかめて一生懸命何かを思い出そうとしていた。
「それは変だな。俺が記憶違いなんかする筈ない。例の小雪の顎のここら辺には、ホクロがあった。お前にはないよな」
彼は言った。
「それとも、ここの女たちは、みんな小雪って名前なのか？　お前も小雪なんだろ？」

sample

「そんな事、ありっこない！　みんなが小雪って名前だったら、どうするのさ？　めちゃくちゃじゃないの？　どうやって管理するの？　ここには、小梅（シャオメイ）も小玲（シャオリン）も小麗（シャオリー）もいるわ。あの人たちは夜になったら来るのよ、昼間はわたし一人だけなの」

娘は言いつのっているうちに声が大きくなり、いきなり誓いを立てた。

「お客さんを騙したりしたら、こっちが人でなしだよ、わたしが小雪なんだから」

運転手はいささか戸惑った。垂楊柳の小雪を、道すがら偶然出会ったどこかの娘と混同したのかと、自分自身を疑った。だが彼は一貫して自分の記憶力を信じていたのだ。運送会社の同僚たちでさえ認めていた。彼は二つの事を覚えるのが最も得意だった。一つは道、もう一つは、あちこちで偶然知り合う娘たちの名前だ。

おかみは、後ろの飯屋から慌てふためいて駆け出して来た。ヒマワリの種をひとつかみ手にしている。ひからびて痩せた顔におしろいを厚く塗り、笑うと、口紅をほどこした唇から不揃いな黒ずんだ歯が現われた。

「お兄さん、久し振りだねえ」

彼女は目を細めてひとしきり運転手を観察したあと、つと手を伸ばし、彼の肩をこづいた。

「兄さんみたいな運ちゃんが、一番薄情なのさ。この間あんなに尽くしてサービスしたのに、やっぱりわたしらを忘れるんだものねえ」

そう言われても、運転手の方でも、おかみが本当に彼を覚えているのかどうか、確かめようとはしなかった。覚えているのかも知れないし、覚えていないのかも知れない。街道沿いの店のこのような常套句は、聞き慣れていた。運転手は、ただ意味ありげに笑っただけで、テーブルに腰を下ろした。彼は言った。

「いつものように、炒め物を二皿と、細切り肉と高菜入りの麺を一つ頼むぜ」

台所に近い場所で、二人の男が段ボールの箱を囲んでトランプをしていた。彼らは、運転手のいる所を一瞥するとす

sample

ぐに素知らぬ振りでゲームの続きを始めた。見かけない顔だったが、おかみが店に雇った二人なのだろう。道すがらのあらゆる店で、このような暇そうな男たちを目にすることができた。彼らはいつも坐っていて、立ち働いているのは、女たちだった。カウンターは入口にあり、ピンク色に塗られていて、白黒のテレビが一台、その上に置いてあった。小雪と名のる娘は、帰って来るとすぐにテレビをつけた。テレビはおそらく年代ものなのだろう、ザァーと音が鳴り、何も映らなかった。娘がスリッパを持って、左側と右側を一回ずつ叩くと、突然映像が現われた。放映しているのは、香港の連続テレビドラマで、一組の男女が、あやしげな標準語を使っていた。何やかや喋っているのを、暫く聞いていると わかって来た。彼らは恋を語らっていたのだ。

運転手は言った。

「うざいんだよ。どこへ車を乗りつけても、必ずこの二人の声だ。口もろくにまわらないのに、やたらに節をつけて、聞いただけでうんざりだぜ」

小雪は、カウンターの中で言った。

「駄目よ！　今は、こんな話し方が流行ってるの。兄さん、知らないの？　こんなにいい番組が嫌いなら、兄さんはテレビがいらないってわけ？」

運転手は言った。

「うちのテレビは置物なんだよ。一年三百六十五日、俺は百八十日は外に出てるんだ。見る暇があるかってんだ。テレビではスポーツを見るのさ。ほかのは見ない。見たら眠くなっちまう。香港や台湾のドラマは、中味はまあまあだが、音は嫌だね。あの二人の声が聞こえたら眠くなる」

小雪は言った。

「違うわ。わたし、居眠りしたらテレビを見るの。見たら眠くなくなるの。今見ているの、最後の二回よ、兄さん、口をはさんで邪魔しないで。聞こえないじゃない」

sample

おかみは、台所から料理を運んで来ながら、二人の男の間にある段ボール箱を蹴った。「まだトランプをしているけど、いつまでやるつもりだい。台所に入って、野菜の葉をより分けるのを手伝ったらどうだい！」
おかみは、運転手の近くに来る頃にはすばやく親しげな笑顔に表情をきりかえ、言った。
「ねえお客さん、店の切り盛りが今どんなに大変か、従業員が怠け者でさ。わたしばかり忙しいんだ。ほかの奴はトランプをやったりテレビを見たり、いい気なもんだよ！」
運転手は何か言おうと思ったが、あくびをしてしまった。
「あのテレビは聞いちゃいられねえな。聞くと眠たくなる」
おかみはまばたきして、運転手をじっと見つめた。
「兄さん、顔色がすごく悪いよ」
彼女は、いやにおどおどして大声をたてた。
「顔色がよくない、ちょっと休んだ方がいいよ、どれ位運転して来たの？　とても疲れてるみたいだ」
運転手はかぶりを振り、椅子に斜めに坐って、おかみに向かい曖昧にほほえみかけた。
「兄さん、大丈夫だろうね」
おかみは手を伸ばして運転手の額を触り、言った。
「熱くない、熱くない。病気じゃなければそれでいい。金を稼ぐのは大変だよ、命を削るようなもんだ、兄さんそうだろう？　疲れてるんだから、ちょっと休みなさいよ」
運転手は言った。
「疲れてるんじゃない。正直いうと、びっくりしたのさ。寺前村で事故があったんだ」
「誰が事故を起こしたんだい？」
おかみは、にわかに緊張して、一歩後ずさり、探りを入れるように尋ねた。

sample

「兄さん、大丈夫だろうね」
「俺が事故を起こしたなら、どうしてここへ来て坐っていられるんだ？」
運転手はへへっと笑い、テーブルの下で両脚を揺すった。
「俺じゃねえよ。なんでそんなに俺をじっと見るんだ？　俺じゃなくて、俺の前にいた、石炭を運ぶ車の運転手だよ！」
「石炭トラックは一番荒っぽい運転をするんだ。運転手はみんないかれていて、わざと人にぶつかるみたいさ」
おかみは、客の話に合わせて、災難そのものにもほどほどの興味を示した。
「兄さん、その目でぶつかるのを見たのかい？　どんな人がひかれたの？」
「じいさんだ。そのじいさんが、爆竹みたいに破裂するのを俺は見たんだよ。石炭トラックは、ずうっと俺の後ろにいた。その運転手が、俺の車を追い越した途端にぶつかるのが見えた。ボンと音がして、畜生め、爆竹を鳴らすみたいに。こんなに長い間運転手をしていて、なにしろ初めて自分の目で人がひかれるのを見たんだからな。そのじいさんは、爆竹みたいに破裂したよ」
「そんなら急いで助けなくちゃね。寺前村には、診療所があるんだよ」
「助けるだって？　ひいた奴は車から降りもしないで、畜生め、逃げやがった！　俺はうしろにいたから、困りきったよ。進むにも退くにも、どっちも難しかった。俺は、歯を食いしばって前進したよ。ところが、なんとそのじいさんは死んでなくて、俺が通った時にぱっと起き上がった。体中血だらけで、俺のトラックを引っ張ろうとしたんだ！」
おかみは驚いて叫んだ。
「たまげるねえ、死んでなかったって？　今頃は死んだだろうか？」
「知るもんか。俺だって、あいつに死ぬほど驚かされたんだ」
運転手は料理に箸をつけて食べ始め、噛みながら言った。

sample

「多分、生きてはいないだろうよ。じいさんは畑から公道に上がって来たんだ。雨が降っていて、雨粒は大豆よりもでかかった。道の様子ははっきり見えないし、田舎のじいさんは反応が鈍い。あいつらはうつむいて急いでいるだろ。畜生、自分一人のために国が公道を作ってくれたと思ってやがる。じいさんは、籠をしょっていた。中味は、トウガラシさ。ぶつかった時は、爆竹みたいにポンと跳び上がったんだ、トウガラシもそこら中いっぱいに飛び散っていた。嘘じゃねえ、人もトウガラシも、両方とも飛んだよ、でかい爆竹を鳴らすみたいにな！」

彼らの話し声はとても大きく、カウンターの小雪の抗議を招いた。

「お願いだから、声を小さくして。全然聞こえない。方（ファン）ねえさんは、遺書を書いているの、自殺しようとしてるのよ！」

おかみは小雪の方をちらりと見て、首をそちらへ伸ばした。明らかに、彼女の興味もテレビにあった。

「方ねえさんは、昨日の回で死のうとしていたのに、今日まで引き伸ばしてやっと遺書を書いたのかい！」

おかみはいいながら運転手に笑いかけ、詫びるように言った。

「このドラマは面白くて、毎日見ているんだよ」

それから突然声を低め、運転手の耳に顔を近づけると言った。

「暫くしたら、小雪を裏に行かせて、お客さんの肩叩きをさせるから。骨休めをしたらいい。うちの小雪は可愛いでしょうが」

運転手はちょっとためらって言った。

「あの子はテレビを見たがってるから、見せてやれよ。俺は裏で仮眠できればそれでいい」

「仮眠だけじゃ駄目だったら」

おかみはなれなれしく運転手をつついた。

「お客さんは何も考えないでいいよ。こんなに疲れてるんだから、しっかり骨休めしなくちゃ。あの子のするべきことは、わたしが手配するから」

sample

運転手はテレビの前の娘をちょっと見てから、また窓の外を見やった。雨は暫くの間やんでいたが、また降り始めた。公道に車の流れはなかった。雨の中の道は、ひと筋の黒い川のように静かに、透明な光をまたたかせていた。飯屋で飼っている鶏か、それともアヒルが、公道に上って悠然と歩きまわっていた。運転手は、公道の端にまばらに植えられた、数本の香椿（シアンチュン）とエンジュの木を見た。木の高さは人の背丈の半分しかない、おそらく去年植えられたばかりなのだろう。彼は、ふとここが垂楊柳と呼ばれていることを思い出し、なぜ一本のヤナギもないのだろうかといぶかしんだ。

「ここはどうして垂楊柳という名前なんだい？」

運転手は口の中でブツブツ言ったが、おかみには聞こえなかった。彼女はもうテレビの前に腰かけていて、緊張した面持ちでスクリーンを見つめ、口からプップッとヒマワリの種の殻を吐き出していた。あの、小雪という娘は、今はカウンターに坐っていた。黒のストッキングと、そこに刺繍された金糸の花模様のほかには、彼女の側面とうしろ姿しか見えなかった。彼女の乳房は袖無しの上着の中に注意深くしまわれて、まるで畑のトウモロコシが苞葉にくるまれているようだった。彼女は、腰をおろしている時、手を両脚の下に置いていた。この仕草は、以前に知っていた気がして、運転手は記憶の中の、あの小雪という名前の娘を思い出した。もしかしたら、前回出会っていたあの小雪本人だろうか？　もしかしたら、彼が間違えたのかもしれない。こんなに長年、長距離を走ってきて、街道沿いの店で知り合う娘は、あまりにも大勢いたのだ。運転手を困惑させたのは、彼に対する小雪の態度だった。もしも彼女が、あの小雪本人だったら、彼女は彼のことを覚えているはずだった。去年、垂楊柳で彼が出会った、めそめそ泣いている田舎の小娘は、全くの世間知らずだった。八十元のために供物にされようとしている畜殺場の子羊のように。だが彼は彼女に何もしなかった。彼女の涙と、従順に耐え忍ぶ姿が、彼の哀れみを誘った。彼は何もしなかったが、金を払い、チップも渡した。小雪が、どれほど拙いくちづけを彼の顔にして、感謝を示したか、彼は覚えていた。彼女は言った。

「兄さん、一生忘れないよ。あんたはいい人だね」

sample

彼はもちろん善人だった。何もしないのに金を払い、自分のした事に満足を感じた。彼は、垂楊柳の小雪は自分を覚えているはずだと断定した。しかし事実は、二重の失望をもたらした。彼は、誰が小雪なのかはっきりさせることができず、小雪の方も、彼を覚えていないようだった。

部屋の設備はみすぼらしく、垢抜けなかった。旧式の木のベッド、洗面器を置くラック、そして壁いっぱいに香港と台湾のスターのポスターが貼ってあった。

床に敷いたビニールのカーペットは水拭きしたばかりで、踏むとぬるぬる滑った。運転手は、都会ではもう見かけなくなった蚊帳が、天井からベッドにたれ下がっているのを見て、なつかしく思った。去年垂楊柳に立ち寄った時、こんな蚊帳があった覚えはない。秋だったからかもしれない。運転手は蚊帳にもぐり込み、あちこち触ってみた。寝具はどうやら清潔そうだったし、香水までふってあった。彼はゆっくりと横になり、ため息をついた。おかみが何を手配するのか、彼は知っていた。彼は何かを待ち続け、待っている間、手櫛で髪を梳いていた。街道沿いの店で以前過ごした時間と違うのは、彼の心が重いということだった。彼は何かを待ち続けていたが、自分が何をしたいのか、よくわからなかった。

小雪は、お湯のポットを持って入って来た。明らかに、彼女はおかみにせかされてやって来たのだ。不本意さが、笑顔をこわばらせていた。

「兄さん、先に洗ってちょうだい」

彼女は、蚊帳の外に立って言った。

「おかみさんの言いつけなの、まず洗って下さい、って」

運転手は言った。

「何を洗うんだ、足を洗えっていうのか？」

sample

小雪は身をよじって、答えなかった。彼女の表情は、しぶしぶ彼の相手をしに来たことを、はっきり物語っていた。
「何を洗えってか、早く言えよ」
運転手は、頭を突き出して、ちらりと小雪を見た。相手が答える気がないのを見てとると、蚊帳の中に頭をひっこめて言った。
「洗わねえよ。俺は汚くない、何を洗えってんだよ？」
小雪は言った。
「かまわないわよ。お客さんがきれい好きじゃないのは、お客さんの勝手だよ。とにかく、先にはっきりさせておくけど、わたしは遅番じゃないんだから、アレはしないんだから」
「お前が何をしないって？」
運転手は、蚊帳の中で笑った。
「お前みたいな子は見たことがない。何もしないなら、なんでここにいるんだ？　おかみを呼んで来い！」
「いやよ。お客さんの気を悪くさせたりしてないもの」
外の小雪の声は、すぐに穏やかになり、自分のために言い訳しているように聞こえた。彼女は、お湯のポットをベッドの傍に置き、何か思いあぐねているようだったが、ためらいながら口をきった。
「兄さん、洗いたくないなら、洗わなくていいよ、わたしが兄さんの足を洗ってあげる。肩叩きもしてあげるし、痒い所も掻いてあげるよ。だけど、ひとつ条件をのんでほしいのよ」
「なんでそう、うるさいんだ。俺は骨休めしたいだけさ。お前と恋仲になるわけじゃなし、どんな条件だよ？」
「十五分間よ」
小雪は言った。
「十五分でどう？　終わったら、わたし隣の部屋へ行ってテレビを見るの。おかみさんに言わないでよ」

sample

「ありっこない！」
運転手は、小雪の意向を悟って、笑いを抑えきれなかった。彼は、娘の口真似をして言った。
「ありっこない。十五分じゃあ十分な骨休めはできないだろ。じゃあ、半額ってことでどうだ？」
「兄さん、お願いよ。今日は最後の二回分なのよ。宣伝を十分ばかり流したら、すぐに始まるのよ。最終回は絶対見なくちゃ。承知してくれる？　いいでしょう？」
「ありっこない！」
運転手は、裏声で言った。
「わたしを動物扱いしてる？　ん？」
彼は、ふと何かを思いついた。
「なら、いっそ十分でいいじゃないか。なんで十五分なんだ？」
「はじめの五分は、主題歌を歌うの」
小雪は、運転手が折れて出たと感じ、喜んで言った。
「兄さん、あんたいい人だね。いい人ってことがわかったよ。一生忘れないよ！」
「去年もそう言って、今年もまた同じこと言うのか」
運転手は、蚊帳の中で冷笑した。
「お前たちみたいな娘が、何を覚えているっていうんだ？　金を覚えてるだけだろう」
「なんのこと？　兄さん、急に冷たくしないでよ」
小雪はぽかんとして、どうしたらいいかわからなくなり、蚊帳をめくろうとした手を引っこめた。
「何でそんな話をし始めるの？　わたしたちみたいな娘って何のこと？　わたしがそういう子だと思うの？」
彼女は、首をかしげて壁のポスターを見ていたが、ひとり言のように言った。

sample

「馬鹿にするなら、こっちだってわざわざ相手なんかするもんか。おかみさんに言いつけたって怖くない。ロクデナシ！」
「喧嘩売るのか？」
「そんなことしてない。いつ、喧嘩売ったよ？」
「ロクデナシって言っただろ」
「喧嘩を売ったことにはならないでしょ。そんな事したら、給料を差し引かれちゃう。兄さん、わたしに濡れ衣を着せないでね」
「お前、何歳になるんだ？　ちっとも聞き分けがないね？　聞き分けもないのに、金は稼ぎたいってか？」
運転手は、娘を睨んだ。その口調は厳しく、また同時にからかっているようでもあった。
「結局のところ、お前は小雪なのか。本当に俺を覚えていないのか？　去年俺がここに寄った時、お前はめそめそ泣いて、林黛玉（リンタイユイ）〈清代の小説『紅楼夢』の女主人公〉のようだったじゃないか。俺は、お前に触りもしないで、金だけは払ったんだ。お前は、二言目には俺を一生忘れないと言ったけど、畜生め、一年もたたずに、すっかり忘れちまうなんてな。俺は林（リン）っていうんだ。お前のリン兄さんだよ！」
小雪は振り向いた。運転手が名乗り出たことに注意を引かれて、彼女は蚊帳を細めにめくった。あるいは運転手の顔を仔細に見てみたいと思ったのかも知れないが、恥ずかしくもあったのか、ベッドの端にすとんと坐った。その様子は、何かを懸命に思い出しているようだ。ベッドの端に坐って、両手を体の下に敷き、ゆらゆら揺れながら、体まで総動員して思い出しているようだった。しかし結局、かぶりを振って言った。
「いや、お客さんがそんなにいい事をしてくれたなら、わたしがまるきり忘れているはずないわ。きっとわたしをからかってるのね。運転手は、みんな人をからかうのが好きだから。劉（リュウ）兄さん、わたしあんたのこと覚えてないよ」
「劉じゃねえよ、おまえ文盲じゃあるまいし、俺は林だよ。木が二つの林、リン兄さんさ」

sample

「リン兄さん、わかった、もう言わないで。わたしの言うことを聞いてくれたら、この次は、きっと兄さんのこと、覚えているよ」

「今覚えてないなら、もうお仕舞いだ。クソ、こっちだって期待しちゃいなかったよ！」

運転手は、苛立って中で起き上がったが、また横になり、急に笑って言った。

「来いよ、テレビを見たくて焦ってるんだろう、最終回が見たいなら、早くしたらどうだ。俺は気分ものらないし、疲れてるんだ。十分もかからないかも知れないぞ！」

すると、小雪は片方の足をさし入れ、もう片足を入れるのにぐずぐず時間をかけていたが、とうとう入って来た。運転手は彼女の顔を見なかった。どうして見たくないのか、自分でもわからなかった。彼はため息をつき、低い声で卑猥な罵り言葉を口にすると、目を挙げて蚊帳の外の天井を見やった。蚊帳の先端は細い白い布で作ってあった。やや黄ばんだその白布をすかして、運転手には、いくつかの束になった赤トウガラシが部屋の梁にかかっているのがぼんやりと見えた。

「上にかけてあるのは何だ？　トウガラシか？」

小雪は言った。

「そうよ。台所で使うトウガラシをかける所がないから、あそこに置いてるのよ」

運転手は、全身をブルッと震わせ、ほとんど無意識に蚊帳の外をちらりと見た。人の気配がした。蚊帳の外の床に老人が坐り、顔中血だらけで、手にひとつかみの赤トウガラシを持っているのがぼんやりと見えた。運転手の手は震え始め、最後に空中でやっと止まった。彼は寝返りを打った。体の内側でふくらんでいた欲望は、引き潮のように失せていき、曖昧な恐怖がこみ上げて来る。彼は突然小雪の手を払いのけ、彼女を蹴り落とした。

「もういい」

大声で叫んだ。

sample

「お前の好きなテレビを見に行けよ」
小雪は、今度は心底驚いた。運転手の突然の暴力に対して覚悟ができていなかったし、どのように対応すればいいかもわからなかった。彼女は足をむき出しにして外に立っていた。あっけにとられたあと、気を取りなおし床の緑色のサンダルを拾い上げた。
「どういうこと、頭、おかしいんじゃないの！」
娘はとうとう泣き出して、サンダルを手に外へ走って行った。
「あんた達はみんな、頭おかしいのよ。いやらしいゴロツキ、恥知らず！　あんた達みたいな悪党の相手なんかするもんか！」
急速に遠ざかる娘の足音が運転手の耳に聞こえた。彼女の泣き声は、たった今、いわれのないひどい苛めを受けたかのようだった。彼自身も、理解できない悔しさを感じた。ありふれたできごとが、急にこんなにも複雑になってしまうとは、予想もしていなかった。自分が垂楊柳で何をしたのか、垂楊柳へ来たのは何のためなのかさえ、分からなかった。すぐに、おかみのわめき声と、数人の慌てふためいた足音が聞こえて来た。運転手は起き上がり、すばやくドアに鍵をかけた。
おかみが外からノックした時、トランプをしていたあの二人の男たちが、小声で何かを相談しているのも聞こえた。運転手は中で言った。
「ノックしないでくれ。何でもない。そっちはテレビを見ればいいし、俺は俺で眠るから。ひと眠りしたらまた先を急ぐさ。勘定を言ってくれればそれでいい」
「兄さん、一体どうしたの？　話してくれなきゃ、こっちもやりようが無いよ」
おかみは言った。
「小雪って子は、世間知らずで、言うことも聞かないんだ。この商売は無理だから、もうあの子のうちへ使いを

sample

やって、言付(ことづ)けてあるのさ。うちから迎えを寄こして連れて帰るように、って。気を悪くしたなら、勘弁しておくれ。夜には小紅(シャオホン)たちが来るから、何かサービスが入り用なら、できる限りお世話しますよ」

「サービスなんか何もいらねえよ。俺はちょっと眠りたいんだ」

運転手は扉を隔てて、おかみのつけている濃厚な香水をかいだ。彼はふいに香水の匂いにも嫌気がさし、手で鼻をつまんで、部屋にある唯一の窓の傍へ歩いて行った。カーテンを開けると、外は一面のトウモロコシ畑だった。雨あがりのトウモロコシ畑は、緑色と黄色が入り混じり、トウモロコシの葉には、透明な雨滴がまだびっしりとついていた。広々とした田野と遠くの丘陵は、雨に洗われて、淡い酒の匂いを醸し出しているようだ。運転手は、白い影が窓にゆらめくのを見て驚き、頭を外につき出した。それは二匹の白いヤギだった。毛をしとどに濡らして寄り添っていた。おそらく、二匹のヤギは長い間窓の下にいたのだろう。運転手は、手を伸ばしてヤギに触った。一匹の白ヤギの背中の毛は、柔らかく湿っていた。だがこの快い手触りは瞬時に消えてしまった。驚いた二匹のヤギは、すぐに窓辺から離れてしまったのだ。

運転手は確かにひと眠りしたかった。十分でもいい、彼は疲れを感じ、自分がもうすぐくずおれてしまいそうだと思った。蚊帳にもぐり込む前に、運転手は洗面器の所へ行き、お湯でよく手を洗った。彼は自分の手の汚さに気づいた。指の股に、ディーゼル油と埃の混じり合った油汚れがあった。洗い終えたあと、彼はいつもの習慣でポケットの紙ナプキンを捜したが、既に使い切っていた。ただ、からっぽでぺしゃんこになったビニール袋を探り出しただけだったが、何かが紙ナプキンの袋といっしょに出て来て、ふわりと床に落ちたのを感じた。彼を最も恐れさせたできごとは、最後の瞬間に起きた。赤トウガラシが彼のポケットから飛び出し、宿屋のビニールのカーペットに横たわっていた。暗赤色の冷たい光を放って。

夜の垂楊柳は別世界だった。気のきいた、小ぢんまりした経済の活況が、賑やかな盛り場らしさを作り出してい

sample

た。日中の雨足が、夜までずっと尾を引いていて、雨は降ったりやんだりを繰り返し、垂楊柳の灯火は、夜の雨の中でひときわ明るかった。天気がよくないせいか、あるいは交通事故が運転手たちの行程を遅らせたのか、今夜の垂楊柳は賑わっていて、合計十七台のトラックの運転手たちが、ここに駐車して夜を過ごしていた。飯屋のいくつかのテーブルは満席になり、裏の宿屋の部屋は、すべて定刻より早く灯がついた。おかみは張り切って、ミニスカートを穿いた一群の娘たちをひきつれて、忙しく立ち働いていた。

十七人の運転手の中に、李という若者がいた。石油タンク車を運転していて、小雪とは馴染みだった。彼は席に坐るとずっとあたりを見回し、華やかに着飾った娘たちの中に小雪の姿を捜していたが、見つからなかった。若者は、おかみに小雪の行方を聞いた。何回聞いても、忙しいおかみはその都度彼にちょっと待つようにいった。彼は待った。酒も飲まず、他の運転手と話もせずに、ひとしきり待っていると、ついにおかみがやって来た。おかみがもたらしたのは、意外な知らせだった。

彼女は言った。

「あいにくだねえ、小雪は身内に事故が起きてね。つい今日の昼間のことさ。小雪の父親が、迎えに来ることになってたんだが、公道でトラックにひかれたんだ」

「寺前村の事故のことか？」

若者は暫くあっけにとられていたが、突然何か思い出した。

「現場はまだ通行止めだぞ。その運転手は逃げたっていうじゃないか」

「その通りだよ。小雪が夕飯を食べている最中に警察が来たよ」

おかみは、カウンターの上のプラスチックの碗を指さして言った。

「見えるだろ。小雪の夕飯は、まだあそこに置きっ放しなのさ」

李という名の運転手は、呆然として口を大きく開けたまま、言葉を失った。おかみは、彼の肩をちょっと叩き、く

sample

すくす笑って言った。
「馬鹿面しちゃって。あんたが人ひいたわけじゃないだろうに、何を緊張してるんだい？」
李は尋ねた。
「誰がひいたんだ？」
おかみは目をパチパチさせ、何か彼に耳打ちしたいように見えたが、ついにその考えを打ち消した。
「わたしが知るもんかね。知っていたら、そのロクデナシの運転手をつかまえておくよ！」
彼女は空中で曖昧に手を振り回してから、また運転手の肩を叩いた。
「小雪のことは気にしないで。あの子は馬鹿で垢抜けなくて、ちっともよくないよ」
おかみは言いつつ、李の耳もとに近づき、小声で囁いた。
「もう少ししたら、小玲にあんたの相手をさせるから。あの子はこの店の看板娘で、器量よしのうえに、専門学校の卒業証書まで持ってるんだ、きっと御満足いただけますよ！」

〈了〉

コレクション中国同時代小説 4　離婚指南
蘇童　著／竹内良雄・堀内利恵　訳
定価三、七八〇円（本体三、六〇〇円）
ISBN978-4-585-29514-3　C0397
四六判・上製・四八八頁
二〇一二年四月刊行予定
勉誠出版 株式会社　刊

sample